

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：42651

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25871021

研究課題名(和文)「知」が埋め込まれた生活空間を創る「教育エージェント」協働モデルの国際比較研究

研究課題名(英文) A Cross-National Study on the Model of Collaboration among "Educational Agents" toward Creation of a Creative Situated Learning in Life Circumstances

研究代表者

尾崎 博美(Ozaki, Hiromi)

新渡戸文化短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：10528590

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「学校知」とは異なる「知」を教育リソースとして子どもたちに伝えることができる「教育エージェント」の実践調査を通して、子どもたちが必要とする生活知(実践知)のリソースは何か、当のリソースを子どもたちに提供し得る能力をもつ教育主体はどのようなものかについて検討を行なった。その上で、学校と学校以外の教育リソースとの連携がもつ効果・意義・課題を明らかにしたうえで、よりよい連環を形成するための「教育エージェント」モデルを提示した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I showed the following two points through investigation of some practices of "educational agents" and their "educational resources." Firstly, I made it clear the form of "Practical Knowledge" in practices of "educational agents." Secondly, I examined the concept of the "educational agents" in order to create the required circumstance to transmit "educational resources" to children. In conclusion, I made it clear the efficiency, significance and issues of their practices, and proposed the model of collaboration among them for establishing cooperative relationships between schools, families and communities.

研究分野：教育学

キーワード：アフタースクール 教育エージェント 学校-家庭-地域の連携 生活知 実践知 創造性

1. 研究開始当初の背景

(1) 問題設定

「地域に開かれた学校」構想が提案されて以来、学校・地域・家庭の連携は日本における主な教育課題の一つとして提示されてきた。その背景には「学校知」と「生活知(実践知)」の分離という問題がある。「勉強ができて「生きる力」をもつ子どもを育成できない学校教育」に対する批判は現在もなお続いている。

その一方、単に学校から地域・家庭へ子どもを「還す」だけでは、上記の問題の有効な解決策とならないこともまた指摘されている。すなわち「地域・家庭の教育力の低下」の問題は、現在の子どもをとりまく環境がもはや“教育的環境”とは呼ぶには不十分であることを示唆している。この「学校知」と「生活知(実践知)」の分離、「地域・家庭の教育力の低下」という二つの問題に対して、本研究では「アフタースクール活動」にその有効な解決策の手がかりがあると考えられる。本研究における「アフタースクール活動」とは、学校の正規カリキュラムの外に位置付けられ、かつ、学校・地域・家庭・民間組織がもつ教育リソースを活用した教育活動を意味する。

(2) 本研究課題に関する先行研究

本研究課題に関する研究成果は下記の2つである。

大学-民間組織の連携による大学内保育施設の研究(2005-2011)

本研究が「アフタースクール活動」に着目するきっかけの一つは、2005年より継続して行った大学内保育施設の調査及び分析である。大学内保育施設は、大学の中に「保育」や「子育て」という営みを導入すると同時に、その運営が社会福祉法人、NPO、保育系株式会社という様々な学校外組織によってなされるという特徴をもつ。

この研究成果の一つは、大学内保育施設が大学のリソースと大学外のリソースとを共に活用することによって高い教育的効果を生み出しているという点である。

J. R.マーティンの提起する「教育エージェント Educational Agents」構想の研究(2007-2008)

上記の大学内保育施設という実践を分析する視点となったのが、J.R.マーティンが2002年に提唱した「教育エージェント」の考え方である。これは、教会、図書館、博物館、児童館、出版社、放送局といった学校外の教育リソースを有するあらゆる組織を、学校と同等の教育主体としてみなす捉え方である。このときマーティンは全ての「教育エージェント」がもつ教育的責任と教育可能性とを指摘し、多様な「教育エージェント」の協働のみが子どもにとって真に教育的な環境を創りだすと論じた。

(3) 本研究課題の設定

以上の研究成果を踏まえ本研究では、「多様な教育エージェントの協働」の形を具体的に構築・提示すること、及び、当の協働が創る「知」そのものを「生活空間に埋め込まれたもの」として再構築することの必要性を強く認識するに至った。それによって、「学校知」と「生活知(実践知)」との分離の問題を、単に概念上の転換としてだけではなく具体的な教育形態・教育実践の転換として解決すること、及び、子どもたちをとりまく「生活空間」をかつての地域・家庭がそうであったような、真に教育的な空間(=「知」が埋め込まれた生活空間)へと変容させることが可能となるのである。

〔関連する研究〕

・科学研究費若手研究(B)「国際比較に基づく大学内保育施設の意義と役割に関する基礎的研究」<研究代表者 尾崎博美、2010年-2011年>

・ジェーン・R・マーティン著、生田久美

子監訳、大岡一亘、奥井現理、尾崎博美訳
『カルチュラル・ミスエデュケーション
「文化遺産の伝達」とは何なのか』、東北大学出版会、2008年。

2. 研究の目的

本研究の目的は、国内・国外における「アフタースクール活動」(学校外教育活動)の比較分析を通して、学校・地域・家庭・民間組織の教育リソース連環(=「教育エージェント」協働モデル)を構築することにある。それによって、子どもたちをとりまく環境としての「知」が埋め込まれた生活空間がもつ教育的意義と可能性、及び当の生活空間を創造するための課題を提示する。具体的には以下の2点である。第一に、国内・国外における「アフタースクール活動」の実態を調査し、学校・地域・家庭・民間組織の教育リソースがどのように活用され、いかなる教育的効果を発揮しているかを吟味する。第二に、「知」が埋め込まれた生活空間を創造するために必要な「教育エージェント」協働モデルの特徴・性質・及び、実践的課題を提示する。具体的には、以下の3点を目指す。

(1) 「教育エージェント」の概念的定義

第一に明らかにすべきことは、「学校知」とは異なる「知」を教育リソースとして子どもたちに伝えることができる「教育エージェント」を明確に定義することである。

「学校から地域・家庭へ子どもたちを還す」というスローガンが空疎なものとなす理由は、地域・家庭において子どもたちを実際に導く教育リソースはどこにあるのかが明示されていない、という点によって説明できる。この問題に対応するため、本研究では、

子どもたちが必要とする生活知(実践知)のリソースをもち、さらには、当のリソースを子どもたちに提供し得る能力をもつ教育主体はどのようなものを明確にすることを旨とする。

(2) 国内・国外における「アフタースクール活動」がもつ理念、特徴、実践上の課題の抽出

第二に、実際に行われている「教育エージェント」協働の実践として「アフタースクール活動」がもつ可能性と課題とを具体的に検証する。この調査が本研究の核であり、概念的検討と実践モデルとを架橋するための手がかりである。

調査対象は、前述の大学内保育施設の研究(2005-2011)を通して導出したものであり、現時点では下記 ~ の4通りに分類し、調査等を実施する。

学校とNPO法人との協働によるアフタースクール活動

学校と民間組織(株式会社等)との協働によるアフタースクール活動

学校と地域共同体との協働によるアフタースクール活動

学校以外の教育エージェント同士の協働による活動アフタースクール活動

上記を対象とした訪問調査を通して、(a)「アフタースクール活動」はどのような理念で設置・運営されているのか、(b)教育実践上の特徴・工夫、課題は何か、(c)学校と学校外の教育リソースがどのように活用され、どんな教育的効果を生み出しているか、の3点を明らかにする。

(3) 学校と学校以外の教育リソースを活かした「教育エージェント」協働モデルの提案

上記(1)(2)に基づき、「教育エージェント」の協働が有効な教育実践として機能するために必要となる要素を提示し、モデル化する。このモデル化は下記の4つの要素から構成される。

学校外組織の教育リソース

[教え手・内容・方法]

学校の教育リソース

[教え手・内容・方法]

学校と学校以外のエージェントによる協働の形

〔内容・方法・効果〕

上記 ～ によって構成される、生活空間に埋め込まれた「知」の形式

以上の検討を踏まえ、最終的に、実現可能な教育エージェントの協働の形を提案することを目指す。

3. 研究の方法

本研究の方法は、文献調査、フィールド調査、調査結果分析及びモデル構築からなる。

第一の文献調査は、「教育エージェント」概念についての理論分析、「アフタースクール活動」に関する先行研究分析、生活知・実践知に関する先行研究調査である。

第二のフィールド調査は、国内における「アフタースクール活動」を対象とした訪問調査、及び、国外における「教育エージェント」連携活動の訪問調査を実施する。

第三の調査結果分析及びモデル構築は、第一、第二の結果を踏まえ、「アフタースクール」活動が構築し得る「知」(生活知・実践知)の体系、「知」が埋め込まれた生活空間の実現可能性とそのモデル、「知」が埋め込まれた「生活空間」を創り出す「教育エージェント」協働のモデル(実例、特徴、枠組み等)を提示する。

(1) 文献調査

主たる対象は以下の通りである。

「教育エージェント」に関する先行研究文献及び資料

: 主として J.R. マーティンの著作および関連論文、資料

「アフタースクール活動」に関する先行研究文献及び資料

: 学童保育、放課後のクラブ活動への地域の参入などを対象とする論文、資料
生活知・実践知に関する先行研究文献及び資料

A) 状況的、文脈的な「知」の在り方(生活経験・空間がもつ教育的効果)

B) 生活知・実践知の獲得方法・教授方法
以上 について論じた論文、資料

(2) フィールド調査

フィールド調査の主たる対象は以下の通りである。

学校と NPO 法人との協働による活動

: 新渡戸文化小学校「アフタースクール」(東京都中野区)

学校と民間組織との協働による活動

: イタリア、ローマ市における全国盲人協会教授用教材・書籍の制作センター(イタリア、ローマ市)

学校と高等教育機関との協働による活動

: 京都大学「スーパーサイエンススクール」(京都府京都市)

学校以外の教育エージェント同士の協働による活動

: イタリア、ボローニャ市における、子ども向け図書提供活動(イタリア、ボローニャ市)

: 新潟県越後妻有地区における「大地の芸術祭の里」活動(新潟県越後妻有地区)

また、調査項目は以下の通りである。

活動の設置過程および沿革

学校外教育リソースとアフタースクール活動の関係

活動の理念・カリキュラム

スタッフの資格、研修制度

活動の運営形態

(運営主体・補助金制度等)

公的學校カリキュラムとの関係

活動の課題や問題

特色ある活動

(リソースの活用、地域との連携等)

(3) 調査結果分析及びモデル構築

以上の文献調査、フィールド調査に基づき、以下の3点から結果分析とモデル構築とを行う。

「アフタースクール」活動が構築し得る「知」(生活知・実践知)の体系

: 非形式的教授がもつ環境要因の同定

「知」が埋め込まれた生活空間の実現可能性とそのモデル

: 「生活空間」としての学校、放課後空間がもつ教育的意義、効果

「知」が埋め込まれた「生活空間」を創り出す「教育エージェント」協働のモデル

: 実例、特徴、枠組み等の提示

4. 研究成果

(1) 「教育エージェント」に関する成果

本研究では、多様な教育主体の協働による「アフタースクール活動」の教育的意義・効果について、理論分析と実践調査、国際比較を包含した体系的研究を行った。その結果として、「知」が埋め込まれた生活空間を創る「教育エージェント」の協働は、以下の2つの共通点があることが明らかとなった。

個々の組織が持つ特徴を教育リソースとして意図的に活用する。

個々の組織の「中」に子どもたちを取り込むのではなく、むしろ個々の組織とその外側との連携や発信を重視する。

上記の点は、学校以外の「教育エージェント」がもつ教育リソースが、環境や状況といった文脈依存性を強くもつことを示唆している。それゆえ、当該のリソースの一部を切り取って「学校」の文脈に単純に取り込むこと（いわゆる「学校化」を行うこと）は、当のリソースがもつ特徴そのものを奪ってしまう結果となる。特にイタリアにおける図書館の活動には、「教育エージェント」側があらかじめ設定した教育リソースを子供たちに提供する形がもつ限界が指摘されていた。すなわち、むしろ子どもたちが求める活動それ自体が新しい教育リソースを提供することを踏まえ、「教育エージェント」が変容することの必要性・有効性が示された。

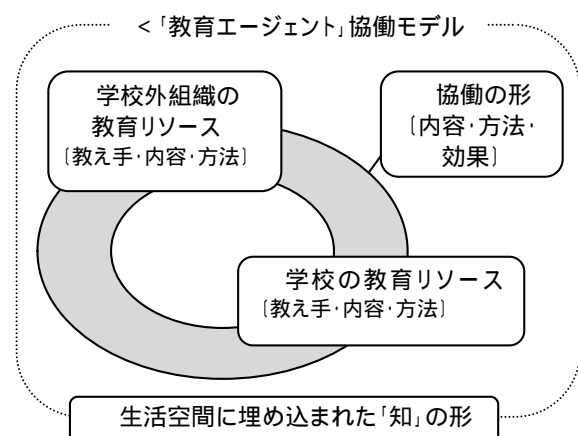
(2) 生活空間に埋め込まれた「知」に関する成果

本研究における、学校と学校以外の「教育エージェント」の協働によるアフタースクール活動の分析は、「机に座って本を読む」形とは異なる「知」の形成過程を明らかにした。その一つが「生活空間に埋め込まれた知」の形である。それは、空間や状況を通して獲得される「知」の形であり、その獲得プロセスである。

当の過程においては、学習者が特定の場面、事例、空間などと結びついた具体的な体験・実感を経ることによって、新たな感覚や概念が生起する。それは、単に「楽しかった」といった印象にとどまるものではなく、学習者自身の「問い」や「省察」として経験される。環境の中で、具体的な事物に様々な感覚、人びととのつながり、文化や歴史の文脈性といったものと出会い、経験することが、生活空間に埋め込まれた「知」の特徴であることが示された。

(3) 新たな保育、教育、子育ての在り方への示唆

本研究は、「教育エージェント」という新たな概念を提示し、生活空間に埋め込まれた「知」が持つ特徴を明らかにすることを通して、学校知と生活知（実践知）とを包含した保育、教育、子育ての形を提案した。すなわち、学校と学校以外の教育リソースとの連携がもつ効果・意義・課題を明らかにし、連携のモデル化を行った（下図を参照）。



以上の研究成果を通して、本研究では、「知」を提供する教育力をもつ生活空間の在り方、よりよい連環を形成するための具体的なモデルの提示を行った。これらはより具体的な実践の分析・構築へと展望を開くものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

1. 尾崎博美、「双方向的な視点の共有に基づくアクティブ・ラーニングの試み 教職科目における学習支援アプリの試用を通して」、『渡戸文化短期大学学術雑誌』、vol. 6、(印刷中)。
2. 尾崎博美、「デモクラシーとしての教育 / 教育としてのデモクラシー 「公衆性」を「知の一様式」と捉えることの意義」、『近代教育フォーラム』、vol. 24、pp. 42-49、2015年9月。
3. 尾崎博美、「教育目的」としての「文化の伝達」を再考する J. R. Martinの「文化」概念の再定義を中心に」、『新渡戸文化短期大学学術雑誌』、vol. 5、pp. 32-46、2015年3月。
4. 尾崎博美、「〔調査記録〕子どもの創造性を生み出す地域の教育リソースの活用 イタリア、ポローニャ市・ラヴェンナ市の調査から」、『こども教育研究所紀要』、vol. 9、pp. 62-73、2015年3月。
5. 尾崎博美、「学校-家庭-地域」の連携が生み出す新たな「知」を問う J. R. Martinの「教育エージェント」論を手がかりに」、『新渡戸文化短期大学学術雑誌』、vol. 4、pp. 1-14、2014年3月。
6. 山路千華、尾崎博美、小山詩織他、「〔実践報告〕五感を通して感じる「アート」から「保育」を考える 新潟県越後妻有地区における「大地の芸術祭の里」の実践を通して」、『こども教育研究所紀要』、vol. 9、pp. 26-61、2014年3月。

〔学会発表〕(計 7 件)

1. 汐見和恵、永房典之、尾崎博美、伊澤永修、善本眞弓、山路千華、「保育者養成校の学生における「保育者の専門性」獲得の構成要素」、日本保育学会第 68 回大会、於椋山女学園大学、2015年5月10日。
2. 尾崎博美、「教育目的論における「翻訳」概念の意義 S. K. Langer の「シンボル形式」論に基づいて」、『教育哲学会第 57 回大会、於日本女子大学、2014年9月13日。
3. 伊澤永修、永房典之、川村祥子、尾崎博美、善本眞弓、山路千華、「保育者の専門性教育が保育学生の意識に及ぼす影響 保育者養成プログラムの構築へ向けて」、『日本保育学会第 67 回大会、於大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学、2014年5月17日。
4. 尾崎博美、「大学の研究・教育を支える学内保育施設の意義：国際比較研究から」、『大阪市立大学女性研究者支援室グローバルなミニセミナー「分野を越えてつながる? -女性研究者育成や支援に必要なこと-国内外

のロールモデルたちと WLB (招待講演) 於大阪市立大学、2014年3月19日。

5. 尾崎博美、「教育目的」論における「翻訳/解釈」の意味 J. R. Martin の 3Cs 概念と S. K. Langer のシンボル形式論を手がかりに」、『日本教師学会第 15 回大会、於環太平洋大学、2014年3月9日。
6. 山路千華、汐見和恵、永房典之、川村祥子、伊澤永修、尾崎博美、「学生の教育課題と効果測定の研究 保育者像の変容に着目して」、『日本保育学会第 66 回大会、於中村学園大学、2013年5月12日。
7. 川村祥子、汐見和恵、永房典之、伊澤永修、尾崎博美、山路千華、「保育者養成校におけるボランティア活動 - 保育実践経験「地域の子育て支援」から獲得できる「保育者の専門性」 - 」、『日本保育学会第 66 回大会、於中村学園大学、2013年5月12日。

〔図書〕(計 3 件)

1. (共著)尾崎博美他著、井藤元編『ワークで学ぶ道徳教育』、ナカニシヤ出版、(第7章担当、84-98) 2016年。
2. (共著)尾崎博美他著、下司晶編『「甘え」と「自律」の教育学』、世織書房、(第部第4章担当、189-213) 2015年。
3. (共著)尾崎博美他著、井藤元編『ワークで学ぶ教育学』、ナカニシヤ出版、(第1、6章担当、3-16、67-80) 2015年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾崎 博美 (OZAKI HIROMI)

新渡戸文化短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：10528590